

新著紹介

○日本遣歐使者記

グワルチエリ著

木下杢太郎譯

岩波書店出版

昭和八年三月

定價 二圓三十錢

本書は一昨年四月に濱田博士がかゝれた天正遣歐使節記に詳述された大友・有馬・大村の三公子がローマに使した旅行記一五八六年のローマ版を丁寧に翻譯されたもので、四六版二一七頁の冊子であるが、一讀巻を措くことが出来ない。當時の宣教師共がいかに日本人を理解してゐたか、十五歳に近い三公子をいかに厚遇したかといふ事を知るだけでも、この上もない資料であると信ずる。(藤田)

雜報

○支那産生漆

本邦内地にて需要せらるゝ生漆の八割方は支那より輸入せられ、其大部分は漢口を中心として取引される、支那漆は揚子江沿岸各省及南支那一帯に産出するも、主として貴州省東北部より四川湖北兩省の境界線を北に陝西南部に亘る帶狀を畫きたる地帯を特産地とする、其品質は日本産に劣るも、價格低廉なる爲め、諸漆器車輛の塗料、金物の燒着、又は防錆に用ひられ、漢口より一年に一萬五千擔乃

至二萬擔、價格百萬海關兩乃至百七十萬海關兩に達する、しかし近年佛領印度支那から安物漆が多量に輸入されて昭和七年には支那漆一萬二千擔に下つた、今支那に於ける漆の産地を各省別にのぶれば左の如し

湖北省施北地方

七、八千擔

同建始地方

四、五千擔

陝西省平利地方

二千擔

四川太寧及湖北、興山房縣地方

三千擔

湖北竹山、竹溪、及陝西興安地方

四千擔

湖北省、鄖陽地方

二、三千擔

四川省彭水地方

三千擔

同會陽、秀山、潛水地方

六千擔

貴州省銅仁地方

二千擔

施南地方のものは、萬縣に出廻り、汽船にて漢口に達するものと、陸路宜昌に出るものとあり、本邦へ輸出さるゝものは色合淡黄、純分六、七割にして乾燥容易するもの五、六千擔に達する、建始地方のもの之につき純分五割五分乃至七割、太寧興山房縣の産と共に巫山又は巴東より民船にて宜昌に集るもの多く更に漢口に出廻るを例とす、鄖陽、竹山、竹溪、及興安平利の産は從來老河口をへて民船にて漢口に集まりたるが、近來漢水筋に共匪の危險ありて、陸路平漢線許昌に達し、同地より汽車便にて漢口に送られることゝなれり。

支那の漆樹は主として地山に苗植し、移植後七八年にして